

## 列王記第一-2章 「ソロモンの王位の確立」

### 1A アドニヤの勝手な即位 1

1B ダビデの肉体衰弱 1-4

2B ナタンの速やかな執り成し 5-27

3B ダビデの反応 28-40

4B ソロモンの慈悲 41-53

### 2A ソロモンの正義の執行 2

1B ダビデの遺言 1-12

2B アドニヤの反抗 13-35

3B シムイの忘却 36-46

列王記第一を開いてください。今日から列王記の学びに入っていきます。列王記は、サムエル記の続きです。主がイスラエルの民に王国を与えられました。アブラハムに対して神は子孫への祝福を与えられましたが、ダビデによって王の統治による国を与えられました。その王政がどのように続くのか、そして終わりを迎えるのかを書き記したのが列王記です。大事なのは、ダビデに与えられた主の約束です。サムエル記第二7章を開いてください。12節から読みます。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。しかし、わたしは、あなたの前からサウルを取り除いて、わたしの恵みをサウルから取り去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。(12-16節)」このことが、どのように成就するのかを示したのが、列王記です。

話は、ダビデが話しの舞台から消えるところから始まります。

### 1A アドニヤの勝手な即位 1

1B ダビデの肉体衰弱 1-4

1:1 ダビデ王は年を重ねて老人になっていた。それで夜着をいくら着せても暖まらなかった。1:2 そこで、彼の家来たちは彼に言った。「王さまのためにひとりの若い処女を捜して来て、王さまにはべらせ、王さまの世話をさせ、あなたのふところに寝させ、王さまを暖めるようにいたしましょう。」1:3 こうして、彼らは、イスラエルの国中に美しい娘を捜し求め、シュネム人の女アビシャグを見つけて、王のもとに連れて来た。1:4 この娘は非常に美しかった。彼女は王の世話をするようになり、彼に仕えたが、王は彼女を知ろうとしなかった。

若い子を王にはべらせることは、当時、冷える体を温める療法として用いられていました。ここの「家来」をヨセフは医者として描いているそうです。それで選ばれたのが、非常に美しい娘アビシヤクです。彼女は後で、権力闘争の道具として用いられるところで再び出てきます。「シュネム」の町は、列王記第二でエリシャが接した女、男の子が死んだけれども息を吹き返す奇蹟を行なった女の話で出てきます。タボル山の近くにありますが、雅歌に出てくる、ソロモンの愛した「シュラムの女(6:13)」と同一だと言う人がいますが、確かなところは分かりません。

そして、「王は彼女を知ろうとしなかった」とあります。これは親密に知る、言い換えれば性的に知ることを意味します。彼の体が弱まっていた、ということがありますが、ダビデがバテ・シェバを知ったこと、彼女と寝たことを意識して書いていると私は思います。バテ・シェバが次に出てきますが、彼女との間で犯した罪に対して、ダビデは徹底的な悔い改めをしていて、生涯それを貫いた姿を見ることができます。

## 2B ナタンの速やかな執り成し 5-27

1:5 一方、ハギテの子アドニヤは、「私が王になろう。」と言って、野心をいだき、戦車、騎兵、それに、自分の前を走る者五十人を手に入れた。1:6 ..彼の父は存命中、「あなたは どうしてこんなことをしたのか。」と言って、彼のことで心を痛めたことがなかった。そのうえ、彼は非常な美男子で、アブシャロムの次に生まれた子であった。..

ダビデの体が弱まっていて、彼がエルサレムで起こっていることについてその多くを把握していないような状況でありました。彼が間もなく死ぬかもしれませんが、次の王を立てることをダビデは行なっていませんでした。そのような時に現れたのがアドニヤです。午前に説明しましたが、彼は四男です。おそらく生存している息子の中で一番年上だったのでしょう。そしてアドニヤは、三男アブシャロムと全く同じことを行ないました。戦車、騎兵、そして自分の前を走る者を五十人手にいれました。人々に印象付けるためです。そしてその容姿もアブシャロムのそれと同じで非常な美男子でした。

父ダビデからの後継の話しが出てこないのを待たずして、自分自身で事を行っていこうとするアドニヤは神からの権威を待たないという、哀れな姿を呈しています。「高く上げることは、東からでもなく、西からでもなく、荒野からでもない。それは、神が、さばく方であり、これを低くし、かれを高く上げられるからだ。(詩篇 75:6-7)」主を愛している人は、立てられた権威に従う人です。

そしてなぜそのようなアドニヤになってしまったかを、列王記の著者は、「「あなたは どうしてこんなことをしたのか。」と言って、彼のことで心を痛めたことがなかった。」という理由を述べています。躰や訓練を受けなかった者の魂は、愛されているという確証を持つことができません。それで、自我が増大して自分を人目に目立つところに置かなければ、注目を集めなければ不安になってしまいます。「主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。

(ヘブル 12:6)」

1:7 彼はツェルヤの子ヨアブと祭司エブヤタルに相談をしたので、彼らはアドニヤを支持するようになった。1:8 しかし、祭司ツアドクとエホヤダの子ベナヤと預言者ナタン、それにシムイとレイ、および、ダビデの勇士たちは、アドニヤにくみしなかった。1:9 アドニヤは、エン・ロゲルの近くにあるゾヘレテの石のそばで、羊、牛、肥えた家畜をいけにえとしてささげ、王の子らである自分の兄弟たちすべてと、王の家来であるユダのすべての人々とを招いた。1:10 しかし、預言者ナタンや、ベナヤ、それに勇士たちや、彼の兄弟ソロモンは招かなかった。

驚くことが起こりました。ダビデに生涯に渡って忠誠を尽くしてきた二人の指導者が、アドニヤを支持しています。軍団長のヨアブと、祭司エブヤタルです。二人とも、自分たちの立場が弱められていることを感じていました。ダビデには護衛長ベナヤがいました。彼に対して競争意識を持っていたため、アドニヤを支持したと考えられます。ダビデはかつて、ヨアブを更迭したことがあります。アブシャロムを生かしてほしいとダビデが頼んだことについて、彼は完全に王の意向を無視してアブシャロムを殺しました。そしてダビデは、アブシャロムに付いていた將軍アマサを自分の軍団長にしました。けれども何とヨアブは、アマサを殺して再び軍団長になったのです。ダビデは手を出すことができずにいましたが、徐々にベナヤに指揮権を意向させていたのでしょう。

そして祭司エブヤタルについてですが、もう一人の祭司ツアドクがいます。エブヤタルは、アロンの子イタマルの子孫です。その子孫の中に、サムエル記第一に登場した祭司エリがいます。そしてツアドクはアロンの子エルアザルの子孫です。ダビデは祭司を二人立てていたのですが、エブヤタルはダビデの知らぬうちに祭司職を独占しようとしていました。

彼らの最後は実に哀れであり、残念なことです。これまでダビデが逃亡していた時から彼に付いていき、アブシャロムが反抗した時もダビデに付いていたのに、最後の最後になって自分の地位を確保すべく動いてしまいました。もしかしたら、私たちにもキリストの権威が具体的に見えない時があるかもしれません。そして、自分はいつの間にか主に仕えるのではなく、自分の経験を梃にして自分の地位を確保しようとしてしまうかもしれません。けれども、いつでも神の原則は、「自分を高く引き上げる者は低くされる。」のであります。

アドニヤは、エイン・ロゲルという、ケデロン川とヒノム川が一つになるところにある泉のところδειけにえを捧げて、他の王の子、ユダの人々をみな自分のところに引き寄せようとしています。けれどもそこで、この危機をすぐに察知して動きはじめるのがナタンです。ナタンは、ダビデにバテ・シェバとの罪、ウリヤを殺した罪を指摘した預言者です。彼はダビデを愛する真の友人でした。ここでは彼は、ダビデの子ソロモンを守るためにいち早く動きます。

1:11 それで、ナタンはソロモンの母バテ・シェバにこう言った。「私たちの君ダビデが知らないうち

に、ハギテの子アドニヤが王となったということを聞きませんでしたか。1:12 さあ、今、私があなたに助言をいたしますから、あなたのいのちとあなたの子ソロモンのいのちを助けなさい。1:13 さあ、ダビデ王のもとに行き、『王さま。あなたは、このはしのために、必ず、あなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私の王座に着く、と言って誓われたではありませんか。それなのに、なぜ、アドニヤが王となったのですか。』と言いなさい。1:14 あなたがまだそこで王と話しているうちに、私もあなたのあとからはいつて行って、あなたのことばの確かなことを保証しましょう。』

私たちが知っている話は午前にも話しましたように、ソロモンに対する主の好意を、バテ・シェバの第一の男の子が死んだ直後から読むことができます。「ダビデは妻バテ・シェバを慰め、彼女のところにはいり、彼女と寝た。彼女が男の子を産んだとき、彼はその名をソロモンと名づけた。主はその子を愛されたので、預言者ナタンを遣わして、主のために、その名をエディデヤと名づけさせた。(2サムエル 12:24-25)」ナタンは、ダビデが犯した罪に対して神が厳しく罰することを知っていると同時に、神のこの上ない憐れみの豊かさと恵みを知っていました。この子が確かに主に愛されていたことを知っていたのです。そして別名エディデヤ、「主に愛される者」と名づけました。

そしてダビデは、主ご自身からソロモンが世継ぎの子になることを告げられていました。歴代誌第一にこう書かれています。「見よ。あなたにひとりの子が生まれる。彼は穏やかな人になり、わたしは、彼に安息を与えて、回りのすべての敵に煩わされないようにする。彼の名がソロモンと呼ばれるのはそのためである。彼の世に、わたしはイスラエルに平和と平穩を与えよう。彼がわたしの名のために家を建てる。彼はわたしにとって子となり、わたしは彼にとって父となる。わたしはイスラエルの上に彼の王座をとこしえまでも堅く立てる。(22:9-10)」ソロモンの意味は「平安(シャローム)」から来ています。ダビデの生涯が苦難からの救いの特徴づけていたのに対して、ソロモンの生涯は平安と繁栄がその特徴です。彼は、平和の君キリストの型です。ダビデの生涯の中に、キリストが初めに来られた時に苦しみを経ることを予め示していたように、ソロモンの生涯の中には、この方が世界の王となられて平和と繁栄が世界に満ちることを予め示します。

こうした神の声をダビデは聞いて、それをバテ・シェバに話していました。ところが彼は、公式な形で彼を世継ぎの子として誰にも話していなかったのです。そうした中でアドニヤが勝手に自分を王とするという事件が起こりました。預言者ナタンは、バテ・シェバを通してソロモンが主の御心であることを聞いていました。それでバテ・シェバを通してソロモンへの王位継承をすばやく行うように促します。

1:15 そこで、バテ・シェバは寝室の王のもとに行った。・・王は非常に年老いて、シュネム人の女アビシャグが王に仕えていた。・・1:16 バテ・シェバがひざまずいて、王におじぎをすると、王は、「何の用か。」と言った。1:17 彼女は答えた。「わが君。あなたは、あなたの神、主にかけて『必ず、あなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私の王座に着く。』と、このはしのためにお誓いになりました。1:18 それなのに、今、アドニヤが王となっています。王さま。あなたはそれをご存

じないのです。1:19 彼は、牛や肥えた家畜や羊をたくさん、いけにえとしてささげ、王のお子さま全部と、祭司エブヤタルと、将軍ヨアブを招いたのに、あなたのしもべソロモンは招きませんでした。1:20 王さま。王さまの跡を継いで、だれが王さまの王座に着くかを告げていただきたいと、今や、すべてのイスラエルの目はあなたの上に注がれています。1:21 そうでないと、王さまがご先祖たちとともに眠りにつかれるとき、私と私の子ソロモンは罪を犯した者とみなされるでしょう。」

バテ・シェバにとっては、この嘆願は自分の命に関わることです。招かれなかったソロモン、また自分はその母ですからアドニヤが王となれば殺されるのは必至です・

1:22 彼女がまだ王と話しているうちに、預言者ナタンがはいって来た。1:23 家来たちは、「預言者ナタンがまいりました。」と言って王に告げた。彼は王の前に出て、地にひれ伏して、王に礼をした。1:24 ナタンは言った。「王さま。あなたは『アドニヤが私の跡を継いで王となる。彼が私の王座に着く。』と仰せられましたか。1:25 実は、きょう、彼は下って行って、牛と肥えた家畜と羊とをたくさん、いけにえとしてささげ、王のお子さま全部と、将軍たちと、祭司エブヤタルとを招きました。そして、彼らは、彼の前で飲み食いし、『アドニヤ王。ばんざい。』と叫びました。1:26 しかし、あなたのしもべのこの私や祭司ツァドクやエホヤダの子ベナヤや、それに、あなたのしもべソロモンは招きませんでした。1:27 このことは、王さまから出たことなのですか。あなたは、だれが王の跡を継いで、王さまの王座に着くかを、このしもべに告げておられませんのに。」

バテ・シェバのみが王に伝えては、信憑性に欠けます。それでナタンが、バテ・シェバの訴えに確証を与えました。もしダビデがすでにナタンに告げていれば、このようなややこしいことはする必要がありませんでした。けれども、バテ・シェバのみにこの誓いを立てていたのです。それで、彼女との約束にしたがってダビデが動くことを期待しなければいけませんでした。

### 3B ダビデの反応 28-40

そこでダビデは動きます。かつてヤコブが、寝床から力をふりしぼって起き上がり、床に腰かけてヨセフの子二人への祝福、そして十二人の息子への預言を行ないました。ヘブル書には、「信仰によって、ヤコブは死ぬとき、ヨセフの子どもたちをひとりひとり祝福し、また自分の杖のかしらに寄りかかって礼拝しました。(ヘブル 11:21)」とあります。ダビデも、主から与えられた言葉にしたがって信仰をもって行動に移します。

1:28 ダビデ王は答えて言った。「バテ・シェバをここに呼びなさい。」彼女が王の前に来て、王の前に立つと、1:29 王は誓って言った。「私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださった主は生きておられる。1:30 私がイスラエルの神、主にかけて、『必ず、あなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私に代わって王座に着く。』と言ってあなたに誓ったとおり、きょう、必ずそのとおりにしよう。」1:31 バテ・シェバは地にひれ伏して、王に礼をし、そして言った。「わが君、ダビデ王さま。いつまでも生きておられますように。」

ダビデがバテ・シェバに確約しましたが、自分の主のことを、「私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださった主」と呼んでいます。この前学んだ通りに、ダビデが主を親密に知ることになったのは、苦難からの救いを経験したからでした。特にサウルの手からの救いが彼の信仰を形作りました。この主の前で、ダビデはバテ・シェバに自分の誓ったことを果します。主が自分を救われたようにバテ・シェバとソロモンの命も救い出される、という意味も込めていたことでしょう。

1:32 それからダビデ王は言った。「祭司ツアドクと預言者ナタン、それに、エホヤダの子ベナヤをここに呼びなさい。」彼らが王の前に来ると、1:33 王は彼らに言った。「あなたがたの主君の家来たちを連れ、私の子ソロモンを私の雌騾馬に乗せ、彼を連れてギホンへ下って行きなさい。1:34 祭司ツアドクと預言者ナタンは、そこで彼に油をそそいでイスラエルの王としなさい。そうして、角笛を吹き鳴らし、『ソロモン王。ばんざい。』と叫びなさい。1:35 それから、彼に従って上って来なさい。彼は来て、私の王座に着き、彼が私に代わって王となる。私は彼をイスラエルとユダの君主に任命した。」

王は、間髪を入れずにすばやくソロモンの即位式を慣行させます。アブシャロムはかつて騾馬に乗って、それで木に引っかかりましたが、雌騾馬は王が乗る高級な動物です。そして、ギホンは泉の湧くところであり、エルサレムの水の供給源になっています。そこで三つの職、つまり王、預言者、祭司がいます。まさしく私たちの主イエスは、預言者として生涯を全うされ、今は祭司として私たちのために執り成しを行ない、そして油注がれた王として地上に戻って来られます。

1:36 エホヤダの子ベナヤが王に答えて言った。「アーメン。王さまの神、主も、そう言われますように。1:37 主が、王さまとともにおられたように、ソロモンとともにおられ、彼の王座を、わが君、ダビデ王の王座よりもすぐれたものとされますように。」

ベナヤは、これが主の導きであることを知って、深く感動したのでしょうか。このことで主をほめたたえています。そして主がさらに大きな働きをソロモンを通して行なうことを願っています。

1:38 そこで、祭司ツアドクと預言者ナタンとエホヤダの子ベナヤ、それに、ケレテ人とペレテ人とが下って行き、彼らはソロモンをダビデ王の雌騾馬に乗せ、彼を連れてギホンへ行った。1:39 祭司ツアドクは天幕の中から油の角を取って来て、油をソロモンにそそいだ。そうして彼らが角笛を吹き鳴らすと、民はこぞって、「ソロモン王。ばんざい。」と叫んだ。1:40 民はみな、彼のあとに従って上って来た。民が笛を吹き鳴らしながら、大いに喜んで歌ったので、地がその声で裂けた。

ベレヤには、イタイを長としていたケレテ人とペレテ人の勇士たちも付いてきています。そしてツアドクが天幕からの油を持って来ていますが、当時の天幕は、ギブオンにありました(1歴代21:29-30)。契約の箱はダビデの町にありましたが、祭壇などの他の用具はギブオンにありました。そして民が叫んでいます。地面が裂けるほどに叫んでいます。多くの民の心はアドニヤにはなか

ったのです。

#### 4B ソロモンの慈悲 41-53

1:41 アドニヤと、彼に招待された者たちはみな、食事を終えたとき、これを聞いた。ヨアブは角笛の音を聞いて言った。「なぜ、都で騒々しい声が起こっているのだろう。」1:42 彼がまだそう言っているうちに、祭司エブヤタルの子ヨナタンがやって来た。アドニヤは言った。「はいりなさい。あなたは勇敢な人だから、良い知らせを持って来たのだろう。」1:43 ヨナタンはアドニヤに答えて言った。「いいえ、私たちの君、ダビデ王はソロモンを王としました。1:44 ダビデ王は、祭司ツアドクと預言者ナタンとエホヤダの子ベナヤ、それに、ケレテ人とペレテ人とをソロモンにつけて送り出しました。彼らはソロモンを王の雌驪馬に乗せ、1:45 祭司ツアドクと預言者ナタンがギホンで彼に油をそそいで王としました。こうして彼らが大喜びで、そこから上って来たので、都が騒々しくなったのです。あなたがたの聞いたあの物音はそれです。1:46 しかも、ソロモンはすでに王の座に着きました。1:47 そのうえ、王の家来たちが来て、『神が、ソロモンの名をあなたの名よりも輝かせ、その王座をあなたの王座よりもすぐれたものとされますように。』と言って、私たちの君、ダビデ王に祝福のことばを述べました。すると王は寝台の上で礼拝をしました。1:48 また、王はこう言われました。『きょう、私の王座に着く者を与えてくださって、私がこの目で見えるようにしてくださったイスラエルの神、主はほむべきかな。』1:49 すると、アドニヤの客たちはみな、身震いして立ち上がり、おのこのの帰途についた。

食卓の席は、一挙に恐怖の席となりました。王権の移行が行なわれたかのように見せかけていたのに、自分たちの反逆がばれてしまったからです。

1:50 アドニヤもソロモンを恐れて立ち上がり、行って、祭壇の角をつかんだ。1:51 そのとき、ソロモンに次のように言って告げる者がいた。「アドニヤはソロモン王を恐れ、祭壇の角をしっかりと握って、『ソロモン王がまず、このしもべを剣で殺さないと私に誓ってくださるように。』と言っています。」1:52 すると、ソロモンは言った。「彼がりっぱな人物であれば、彼の髪の毛一本でも地に落ちることはない。しかし、彼のうちに悪があれば、彼は死ななければならない。」1:53 それから、ソロモン王は人をやってアドニヤを祭壇から降ろさせた。彼がソロモン王の前に来て礼をすると、ソロモンは彼に言った。「家へ帰りなさい。」

既にソロモンが王座に着いています。ソロモンがアドニヤの運命を握っています。本来なら、当然のごとく彼を殺します。けれども彼は、当時、神聖な場を侵してはならないという理由で祭壇の角を掴む者を殺すことができないという慣わしがありました。けれども、モーセの律法には、祭壇の角をつかんでも連れ出しなさい、という命令があります(出エジプト 21:14)。だからソロモンは、彼を殺してもよいのです。けれども彼は、大目に見ました。ソロモンの治世の中で、公正に裁きたかったからです。父ダビデの時に行なったことは帳消しにします。けれども、ソロモンの時代に反逆の罪が明らかになったら、その事実に基づいて裁きます。

イエス様も、同じような正義を持っていました。天の御国の奥義の喩えで、敵が麦畑の中に毒麦の種を蒔いて、毒麦が生えてしまいました。しもべたちが、「抜き取りましょうか」と尋ねたら、「良い麦もいっしょに抜いてしまうかもしれないから、そのままにしておきなさい。」と主人は言いました。そしてこう言います。「だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。(マタイ 13:30)」悪が明らかにされた時に最終的に裁きます。それまでは忍耐して、罪が明らかになるまで待つのです。公正明大な裁きができるまで待ちます。

## **2A ソロモンの正義の執行 2**

### **1B ダビデの遺言 1-12**

ダビデは、これまでの自分を変えます。これまでの自分は、大目に見る態度を取っていました。主に裁きを委ねていました。一方で、息子に対して甘やかしていました。けれども、すでに息子ソロモンが王であります。彼がその名前にふさわしい平和の統治をするのであれば、これらの悪の分子に対して正義を下せねばなりません。悪に対しては悪で報い、善に対しては善で報います。そこでソロモンに遺言を残します。

2:1 ダビデの死ぬ日が近づいたとき、彼は息子のソロモンに次のように言いつけた。2:2 「私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。強く、男らしくありなさい。2:3 あなたの神、主の戒めを守り、モーセの律法に書かれているとおりに、主のおきてと、命令と、定めと、さとしとを守って主の道を歩まなければならない。あなたが何をしても、どこへ行っても、栄えるためである。2:4 そうすれば、主は私について語られた約束を果たしてくださろう。すなわち『もし、あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、精神を尽くして、誠実をもってわたしの前を歩むなら、あなたには、イスラエルの王座から人が絶たれない。』

かつてモーセがヨシュアに告げた同じ言葉を、ソロモンに告げました。ソロモンは若く、弱い人でした。彼を力づけなければいけません。その初めに行なったのは、モーセの律法から目を離す名、ということでした。すべての内なる力はここから来ます。勇気ある決断と行動は、内なる人が強められることによって来ます。「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。(エペソ 3:16)」

そしてこの命令は条件付きでした。ダビデの王座そのものについては無条件の約束ですが、それぞれの歴代の王については条件があります。「あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、精神を尽くして、誠実をもってわたしの前を歩むなら」であります。これをソロモンが行なえば、またその後の王が行なっていけば、イスラエルの王座は続きます。しかしそうではなかった歴史を列王記は記していきます。その後にある、まことのダビデの子キリストがこの条件を全て果たし、永遠の神の御国が保証されます。



2:5 また、あなたはツェルヤの子ヨアブが私にしたこと、すなわち、彼がイスラエルのふたりの將軍、ネルの子アブネルとエテルの子アマサとにしたことを知っている。彼は彼らを虐殺し、平和な時に、戦いの血を流し、自分の腰の帯と足のくつに戦いの血をつけたのだ。2:6 だから、あなたは自分の知恵に従って行動しなさい。彼のしらが頭を安らかによみに下らせてはならない。

ダビデがヨアブの行ったことについて、必ず裁かなければいけないと思っていた事例がこの二つでした。これまでも説明してきましたが、ダビデが敵である將軍や軍隊長をむしろ大きく受け入れることによって平和をもたらしました。ここにダビデに現れた神の恵みがあり、その恵みによって平和が確立しました。ところがアブネルをヨアブは殺したのです。アブネルに対するライバル意識と、そうした恵みと平和のダビデの心は全く介せず、サウル家の將軍だというだけで、またアブネルが自分の兄弟アサエルを殺した復讐心によって殺しました。

ダビデがアブネルをヨアブが殺したことを聞いた時、このようにして神の呪いを宣言しています。「あとになって、ダビデはそのことを聞いて言った。「私にも私の王国にも、ネルの子アブネルの血については、主の前にとこしえまでも罪はない。それは、ヨアブの頭と彼の父の全家にふりかかるように。またヨアブの家に、漏出を病む者、らい病人、糸巻きをつかむ者、剣で倒れる者、食に飢える者が絶えないように。(2サムエル記 3:28-29)」けれども、ヨアブの力はダビデにはどうすることもできませんでした。こう家来たちに言っています。「きょう、イスラエルでひとりの偉大な將軍が倒れたのを知らないのか。この私は油そそがれた王であるが、今はまだ力が足りない。ツェルヤの子らであるこれらの人々は、私にとっては手ごわすぎる。主が、悪を行なう者には、その悪にしたがって報いてくださるように。」(3:38-39)」ヨアブは、あまりにもできる男でした。イスラエルの国益のために猛烈に動く男だったので、事実、この国を勝利に導いていたのです。

そこでダビデは、ソロモンにその裁きを託しました。むろん、むやみに彼を殺すことはできません。けれども、自分の知恵に従って、とダビデが言っているように、知恵を使ってヨアブを正義にしたがって裁くようにしなさい、と言いつけています。公正に裁く機会を待つのです。

2:7 しかし、ギルアデ人バルジライの子らには恵みを施してやり、彼らをあなたの食事の席に連らせなさい。私があなたの兄弟アブシャロムの前から逃げたとき、彼らは私の近くに来てくれたからだ。

同じ正義でも、今度は善に対する報いであります。ダビデがアブシャロムから逃げた時に、マハナイムにおいて食事や寝台を与えたのは、バルジライでした。アブシャロムに勝利した後に、ダビデはバルジライにエルサレムに来てほしいと願いましたが、本人は高齢で、故郷で死にたいと言いました。そこで代わり、バルジライの子に恵みを施すことをダビデは誓ったのです。彼らを途中でないがしろにしてはいけない、ということソロモンにダビデは言いつけます。

2:8 また、あなたのそばには、バフリムの出のベニヤミン人ゲラの子シムイがいる。彼は、私がマハナイムに行ったとき、非常に激しく私をのろった。しかし、彼は私を迎えにヨルダン川に下って来たので、私は主にかけて、『あなたを剣で殺さない。』と言って彼に誓った。2:9 だが、今は、彼を罪のない者としてはならない。あなたは知恵のある人だから、彼にどうすれば彼のしらが頭を血に染めてよみに下らせるかを知るようになる。」

シムイは死罪に値する人間です。けれどもダビデは彼を赦しました。その時の学びでお話ししましたが、シムイが果たして真実な悔い改めをしていたかについて疑問が残りました。彼の問題は、本当の服従ではないということでした。自分を印象づけるような形で悔い改めを訴えました。したがって、事あれば神によって立てられた権威に再び逆らうのではないかという懸念がありました。そこでダビデは判断をソロモンに託したのです。ソロモンには幼い頃から主から与えられた知恵があったようです。父ダビデは若いソロモンに「あなたは知恵のある人だから」と言っています。ソロモンがその知恵にしたがって、彼の反逆心を公正に裁きます。

2:10 こうして、ダビデは彼の先祖たちとともに眠り、ダビデの町に葬られた。

これから後、歴代のユダの王はダビデの町に葬られます。

2:11 ダビデがイスラエルの王であった期間は四十年であった。ヘブロンで七年治め、エルサレムで三十三年治めた。2:12 ソロモンは父ダビデの王座に着き、その王位は確立した。

これについて、ダビデからソロモンに王位が移行します。彼が初めに行なわなければならないのは、今、ダビデが言い残した正義の執行です。

## 2B アドニヤの反抗 13-35

2:13 あるとき、ハギテの子アドニヤがソロモンの母バテ・シェバのところに来て来た。彼女は、「平和なことで来たのですか。」と尋ねた。彼は、「平和なことです。」と答えて、2:14 さらに言った。「あなたにお話ししたいことがあるのですが。」すると彼女は言った。「話してごらん下さい。」2:15 彼は言った。「ご存じのように、王位は私のものであるはずですし、すべてのイスラエルは私が王となるのを期待していました。それなのに、王位は転じて、私の弟のものとなりました。主によって彼のものとなったからです。2:16 今、あなたに一つのお願いがあります。断わらないでください。」彼女は彼に言った。「話してごらん下さい。」2:17 彼は言った。「どうかソロモン王に頼んでください。あなたからなら断わらないでしょうから。シュネム人の女アビシャグを私に与えて私の妻にしてください。」2:18 そこで、バテ・シェバは、「よろしい。私から王にあなたのことを話してあげましょう。」と

言った。

アドニヤは、ソロモンの母バテ・シェバを言いくるめました。「王位は私のものであるはず」と彼は

言って、上手に「主によって彼のものとなった。」と言い足しています。本当に主によって彼のものになったのであれば、王位は私のものであるはず、などと言わなくて良いのです。現状に不満な人、神の主権と権威の中にいられない人はこのように、いつも不満を持っています。

そして「断らないでください」と圧力をかけた後で、「シュネム人の女アビシャクを私に与えて私の妻にしてください」と言っています。これの意味するところは分かりますね。ダビデはアビシャクを知ることにはなかったものの、ほとんどダビデのそばめと同じ地位を得ていました。彼女を妻とすることは、ダビデから王座を取る行為であります。それを、「アビシャクぐらいもらってもいいじゃないですか。主がソロモンを王座に着かせたのだから。」というちょっとした要求に変えたわけです。

2:19 バテ・シェバは、アドニヤのことを話すために、ソロモン王のところに行った。王は立ち上がって彼女を迎え、彼女におじぎをして、自分の王座に戻った。王の母のためにほかの王座を設けさせたので、彼女は彼の右にすわった。2:20 そこで、彼女は言った。「あなたに一つ小さなお願いがあります。断らないでください。」王は彼女に言った。「母上。その願い事を聞かせてください。お断わりしないでしょから。」2:21 彼女は言った。「シュネム人の女アビシャクをあなたの兄のアドニヤに妻として与えてやってください。」2:22 ソロモン王は母に答えて言った。「なぜ、あなたはアドニヤのためにシュネム人の女アビシャクを求めるのですか。彼は私の兄ですから、彼のために、王位を求めたほうがよいではありませんか。彼のためにも祭司エブヤタルやツェルヤの子ヨアブのためにも。」2:23 ソロモン王は主にかけて誓って言った。「アドニヤがこういうことを言って自分のいのちを失わなかったら、神がこの私を幾重にも罰せられるように。2:24 私の父ダビデの王座に着かせて、私を堅く立て、お約束どおりに、王朝を建ててくださった主は生きておられる。アドニヤは、きょう、殺されなければなりません。」

ソロモンは与えられた知恵を十分に用いました。そして、勇敢に決断しました。権威を表す、右の座に着いている母であっても、神が与えられた約束に真っ向から背く行為は断じて許されない、と宣言しています。そしてソロモンは、アドニヤのみならず、その背後でエビヤタルとヨアブが動いていることも見抜きました。

2:25 こうして、ソロモン王は、エホヤダの子ベナヤを遣わしてアドニヤを打ち取らせたので、彼は死んだ。

アドニヤだけでなく、後押ししているエブヤタルとヨアブも罰せねばなりません。

2:26 それから、王は祭司エブヤタルに言った。「アナトテの自分の地所に帰りなさい。あなたは死に値する者であるが、きょうは、あなたを殺さない。あなたは私の父ダビデの前で神である主の箱をかつぎ、父といつも苦しみを共にしたからだ。」2:27 こうして、ソロモンはエブヤタルを主の祭司の職から罷免した。シロでエリの家族について語られた主のことばはこうして成就した。

エブヤタルが、政治的にソロモンの王位に脅威になることはないかと判断したのでしょう。そして、彼がダビデと苦しみを共にしたことを取り上げています。覚えていますか、エブヤタルは祭司アヒメレクを始めとする祭司の町にいるものを女子供すべてを虐殺したドエグの手から何とか逃れてダビデのところに来た者です。彼はダビデの逃亡の初めの時から、共に苦しみを分かち合いました。そこでソロモンの判断では、罷免だけに留めたのです。

興味深いことに、これがかつて神の人が祭司エリに告げた預言の成就でした。エリに対して、彼が神よりも息子たちを重んじたということで、祭司職から絶たれることを告げました(1サムエル2:27-36)。それは約100年前の出来事です。神の言葉はこれだけ確かなのです。

2:28 この知らせがヨアブのところへ伝わると、ヨアブはアドニヤについて、アブシャロムにはつかなかつた。ヨアブは主の天幕に逃げ、祭壇の角をつかんだ。2:29 ヨアブが主の天幕に逃げて、今、祭壇のかたわらにいる、とソロモン王に知らされたとき、ソロモンは、「行って、彼を打ち取れ。」と命じて、エホヤダの子ベナヤを遣わした。2:30 そこで、ベナヤは主の天幕には行って、彼に言った。「王がこう言われる。『外に出よ。』」彼は、「いやだ。ここで死ぬ。」とやった。ベナヤは王にこのことを報告して言った。「ヨアブはこう言って私に答えました。」2:31 王は彼に言った。「では、彼が言ったとおりにして、彼を打ち取って、葬りなさい。こうして、ヨアブが理由もなく流した血を、私と、私の父の家から取り除きなさい。2:32 主は、彼が流した血を彼の頭に注ぎ返されるであろう。彼は自分よりも正しく善良なふたりの者に撃ちかかり、剣で彼らを虐殺したからだ。彼は私の父ダビデが知らないうちに、ネルの子、イスラエルの将軍アブネルと、エテルの子、ユダの将軍アマサを虐殺した。2:33 ふたりの血は永遠にヨアブの頭と彼の子孫の頭とに注ぎ返されよう。しかし、ダビデとその子孫、およびその家と王座にはとこしえまで、主から平安が下されよう。」

アドニヤが行なったのと同じように、ヨアブも祭壇の角を掴みました。けれども、モーセの律法にあるように、祭壇の角という宗教的守りがあっても神の前の正義に打ち勝つことはできません。

そしてソロモンは高らかに宣言します。ヨアブとその子孫にふたりの血が注ぎ返されること、そしてダビデとその子孫は、とこしまでその平安が続くことを宣言しています。これが、ヨアブの流血と、ダビデの信じる恵みと平安の対比です。人を殺すという裁きに対しては、容赦ない裁きがあるのです。「さばいてはいけない、さばかれないうえです。」とイエス様が言われた通りです。

2:34 エホヤダの子ベナヤは上って行って、彼を打ち取った。彼は荒野にある自分の家に葬られた。2:35 王はエホヤダの子ベナヤを彼の代わりに軍団長とし、王は祭司ツァドクをエブヤタルの代わりとした。

こうして、ダビデができなかったことをソロモンは果たしました。ヨアブはソロモン治世においても、少しの間、軍団長でありましたが、今、ベナヤに取って代わりました。

### 3B シムイの忘却 36-46

2:36 王は人をやって、シムイを呼び寄せ、彼に言った。「自分のためにエルサレムに家を建てて、そこに住むがよい。だが、そこからどこへも出てはならない。2:37 出て、キデロン川を渡ったら、あなたは必ず殺されることを覚悟しておきなさい。あなたの血はあなた自身の頭に帰するのだ。」  
2:38 シムイは王に言った。「よろしゅうございます。しもべは、王さまのおっしゃるとおりにいたします。」このようにして、シムイは長い間エルサレムに住んだ。

ソロモンは、シムイが果たして神から来た権威に従うかどうか、その姿を明らかにできる状態を一つ作りあげることができました。エルサレムの中に留まることです。王の近くにいれば、彼は逆らうことができません。けれども王から離れれば、反逆を企むことができます。ですから、エルサレムに留まっていなさい、と命じたのです。そしてソロモンは明確に、この命令に背いたら死刑であることを告げました。後で誤解のないよう、間違いのないようにしたのです。

2:39 それから、三年たったころ、シムイのふたりの奴隷が、ガテの王マアカの子アキシユのところへ逃げた。シムイに、「あなたの奴隷たちが今、ガテにいる。」という知らせがあったので、2:40 シムイはすぐ、ろばに鞍をつけ、奴隷たちを捜しにガテのアキシユのところへ行った。シムイは行って、奴隷たちをガテから連れ戻して帰って来た。2:41 シムイがエルサレムからガテに行って帰って来たことは、ソロモンに告げられた。2:42 すると、王は人をやって、シムイを呼び出して言った。「私はあなたに、主にかけて誓わせ、『あなたが出て、どこかへ行ったなら、あなたは必ず殺されることをよく承知しておくように。』と言って警告しておいたではないか。すると、あなたは私に、『よろしゅうございます。従います。』と言った。2:43 それなのに、なぜ、主への誓いと、私があなたに命じた命令を守らなかったのか。」

シムイの言葉を思い起こさせています。そして、その誓いに基づき死刑にしています。彼としては、忘れていたという弁解ができるでしょう。けれども、王の定めた基準は基準として残っていて、自分は忘れても忘れ去られることはないのです。以前も説明しましたが、神の義に「水に流す」というものはありません。神は変わらない方であり、その義も変わりません。

そしてシムイが奴隷を探したことで死刑に処せられましたが、ソロモンはその悪い心を見抜いていました。単なる忘れたということではなく、その行動の先にある意図的な反逆も見越していました。私たちの心では、大したことはないと思っているかもしれませんが、神は私たちが自分の心を知っている以上に知っておられます。そしてそのことにしたがって裁かれます。「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。(ローマ 2:16)」

2:44 王はまた、シムイに言った。「あなたは自分の心に、あなたが私の父ダビデに対してなしたすべての悪を知っているはずだ。主はあなたの悪をあなたの頭に返されるが、2:45 ソロモン王は

祝福され、ダビデの王座は主の前でとこしえまでも堅く立つであろう。」

先ほどのヨアブに対して言った言葉と同じです。彼の心にあった反逆の思いと、ソロモンの心にあつて平和とは正反対のものです。ソロモンは敢えて対比させて、これからのイスラエルの国が平和に立脚した秩序を保つことを決意しているのです。

2:46 王はエホヤダの子ベナヤに命じた。彼は出て行って、シムイを打ち取った。こうして、王国はソロモンによって確立した。

こうして、ソロモンがイスラエル王国の不安定要因を取り除きました。アドニヤ、ヨアブ、エブヤタル、そしてシムイです。正義を執行することによって、揺るぎない平和が確立します。これから私たちはソロモンの治世における豊かな繁栄と平和を読んでいきます。それはしかるべき正義を執行しているからです。

私たちは、キリストによってもたらされる平和の国の幻を知っています。イザヤ書に数多く書かれています。そこには、メシヤによる平和の幻に満ちていますが、必ず対になって正義も出てきます。例えば、9章7節です。「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」

私たちは正義や裁きという言葉を知ると、すぐに「戦争だ」という印象を抱きます。けれども、キリストの平和は、神の義が十字架の上に現れた、その怒りが満たされたところに基づくものです。イエス様が戻って来られるとき、主は世界の軍隊に対して戦われます。戦って、彼らの死体を猛禽に食わせることによって、平和を打ち立てられるのです。そして、それはご自分の言葉によって打ち立てられます。どんな最新兵器、先端技術の兵器であろうと、神の力に前では無力なのです。

さらに、主は諸国の民を裁かれます。主は、御座に着かれたら、苦しんでいる者、飢えている者、悩んでいる者を助けた者たちに対して、「この小さな者に対して行ったのは、わたしにしたのである。」と言われて御国の中に招き入れます。そうしなかった者は永遠の火の地獄の中に投げ入れられます。さらに、この地上に千年間の統治を行なわれた後、それでも悪魔の誘いによって反逆する者たちを滅ぼした後で、大きな白い御座において人々を裁き、新天新地を再創造されるのです。確かに神は、忍耐するお方です。けれども正義を放棄した方ではありません。神の平和を求める者は正義をも求めるのです。